

織田兄妹の日常

MAXIM_MOKA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仙台事件をきっかけに行われた、日本による異世界軍事派遣。

何回もの交渉、戦いを繰り返し、何とか平和を手に入れることができた日本は、異世界派遣隊に三カ月の長期休暇を与えた。

信幸も例外ではなく、彼は鼻歌交じりに帰宅する。

自宅の扉を開けたその瞬間、平和で、ほのぼのとした日常の物語が始まる…。

注意 これは The Another World の未来の話です。

バトルシーンなどはありません。

初日

目次

1

初日

信幸は鼻歌交じりに、嬉しそうに自宅へと歩いていった。

それもそのはず、長く続いた仕事、異世界派遣が終わり、国から三か月もの休暇を言い渡されたからだ。

「さーて、三か月間何しようか…。」

信幸はそんなことを呟きながら家の扉を開ける。

冷蔵庫の中には3年以上持つ保存食しか入っていないため、何かが腐っていることはなさそうだ。

「ただいま…。あ?」

信幸は家の中に入り、一つの違和感に気が付いた。

明らかにきれいなのだ。

半年以上は家を空けていたため、信幸は掃除するつもりでいた。

だからこそ気が付けたのだろう。

また、リビングからはテレビの音が聞こえる。

家の中に誰かいるようだ。

信幸は警戒しながらリビングへと入っていく。

リビングに入ると、スー…スー…と、一定のリズムで何かの音が鳴っている。

「…寝息？」

音を聞いて、信幸はそう呟いた。

とりあえず、ソファに人影が見えるため、誰か寝ているのだろう。

信幸はゆつくりとソファを上から覗き込んだ。

18歳程度の少女が毛布にくるまって眠っていた。

腰まで伸びた黒髪に、信幸がよく着ていた、縫い目やチャックが赤色の、黒のパ

カー。

信幸はその少女に見覚えがあった。

「…雪？」

信幸が言ったその言葉に反応するように少女は目を覚ました。

少女は目をこすり、信幸の方を見る。

「…兄貴、久しぶり…。」

信幸を兄貴と呼ぶ少女の名前は、織田 雪。

信幸の妹である。

「おう、久しぶり……。って、なんでお前がここにいるんだよ、合鍵とかないぞ。」

信幸は一瞬普通に返事しかけるが、何とか気を持ち直して彼女に突っ込みを入れた。

「んー……。ピッキングした……。」

まだ眠いのか、雪は目をこすりながらとんでもないことを言った。

「お前……。マジかよ……。とりあえず起きてくれ、何かと邪魔だ。」

信幸は彼女の発言に少し引きながら、起きるように言った。

別に起こす意味もないのだが、ソファの近くにはカーペットなどを敷いていないため、落ちて万が一にでも怪我をされたらたまったもんじやない。

「むう……。わかった。」

彼女は渋々といった感じで毛布から体を出す。

彼女のすらつとした白い足が毛布から顔を出した。

「ちよつ、下はどうした？」

信幸はそれを見て、慌てながら後ろを向いた。

「んう、さつきお風呂入ったから、全部洗濯機の中。流石に替えの下着は持ってきてる。」

彼女は少しふらつきながら、ソファから体を起こし、床に立った。

そして信幸のほうへと歩いていく。

「……。やっぱり、眠い……。」

雪はその言葉を最後に、信幸の方へと倒れ込んだ。

「うおっ……。」

信幸は少し驚きながら、彼女の体を支えた。

そのころにはすでに、寝息を立てながら彼女は眠っていた。

「はあ…… はてさて、どうしたものか。」

信幸はため息をつきながらそう言った。

その目は、優しい兄の目になっていた。